

名古屋市立大学人文社会・看護・医学部合同シンポジウム

「脱領域の死生学―いま、死を考える」開催報告

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 土屋 有里子

〈プログラム〉

①「日本の中世の死と現代の死」

土屋有里子（名古屋市立大学
人間文化研究科准教授）

②「身近な死生観を知る―名古屋
市立大学全学アンケート結果
より―」

伊藤美智子（名古屋市立大学
大学院看護学研究科博士後期
課程）

③「死を教えることの意味

― ESD の視点から ―

曾我幸代（名古屋市立大学人
間文化研究科准教授）

④「人生の最終段階に、自分らし
い療養をするために」

奥山 徹（名古屋市立大学病院
緩和ケア部副部長）

〈特別講演〉

「愛する者の死とどう向き合う
か」日本人の終末期の受けと
め方」

カール・ベッカー氏（京都大
学特任教授）

〈全体討論〉

座長 吉田一彦（名古屋市立
大学人間文化研究科教授）



平成二九年一月一六日（土）、
さくら講堂において、死生学シン
ポジウムを開催した。「死生学」は、
人文社会や医療等、異分野の知を
結集して、死にまつわるあらゆる

課題に向き合う学問である。ちょ
うど一年前、本学に分野横断的死
生学研究会が発足したのを機とし
てシンポジウムを開催したが、今
回からは一般公開とし、約二三〇
名の参加があった。
シンポジウムは二部構成で、第
一部は四人のパネリストがそれぞ
れの専門から死に関わる過去と現
状の分析、今後の課題について提
言した。
まず土屋は、いかに納得のいく
死を迎えるかを考えるに際して、
特に有益な情報を与えてくれると
思われる中世（鎌倉時代〜江戸幕
府成立）という時代の死を説明し
た。現実の死の醜さを直視し、死
体が朽ち果てる姿を九段階で絵画
化した『九相図』が中世以後に作
成されること、極楽へ往生する際
に仏が菩薩をともしない迎えにきて
くれる信仰について紹介し、それ
を現代の医療現場における「お迎
え現象」のベースとして位置づけ

た。そして現代においても、他者
の不思議な、時として非科学的な
言動を、自らの常識で判断し否定
しないことが、個々の納得のいく
穏やかな死に結びつくのではない
かと述べた。
次に伊藤は、平成二九年四月〜
七月に、名古屋市立大学の全学部
生及び名古屋市立大学医学部附属
病院の医師・看護師に対し、死生
観とその関連要因を明らかにする
ために実施した質問紙調査の結果
について報告した。結果として、
死への不安は学生と医師・看護師
双方で年齢が低いほど大きい傾向
があること、死に関する経験があ
る群では、ない群に比べて死への
関心が高いこと、死に関する経験
がある群では、死への恐怖・不安
が少なく、死を回避する傾向が低
いことなどを述べ、この結果を自
身の死生観を考える一助としてほ
しいと述べた。
曾我は、自然災害やテロ、子ど
もや若者の自殺など、子どもをと
りまく社会が「死」の情報であふ
れているなかで、教育で死を通し
て「生」そのものについて考える
ことができなかと提言した。す
でに子どもは教育活動のなかで他
者の死に出会っているが、それら
の意味、すなわち一人ひとりの「他

者」がどう生きたのが伝えられていないという現状がある。その点について、文化に根ざした社会づくりをめざし、捨象された知識体系を現代社会のなかで再価値づけていくことを求める ESD (Education for Sustainable Development: 持続可能な開発のための教育) の観点から、新たな可能性を見いだしていきたいことであつた。

奥山は、身体疾患患者に対する心のケアを専門とする精神科医としての経験から、人生の最終段階に自分らしい療養をするために大切と考えることを概説した。まず、現代医療においては、患者の意向を尊重し、病気の治癒よりも生活の質を重視した医療が提供されるようになってきていることを説明した。その上で、人生の最終段階に自分らしい療養を実現するためには、病状を適切に理解し、自分が残された時間の中で何に優先順位を置くかを考えながらインフォームドコンセントに主体的に参加することが大切であること、そのようなインフォームドコンセントに備えるために、健康な時から人生の最終段階の過ごし方を考えたり家族と話し合ったりすること、人生において何が大切かを考えることな

どを提案した。

第二部は、長年日本人の死生観を人文系、臨床系双方から研究してこられたカール・ベッカー氏による特別講演であつた。ベッカー氏は四人の発表内容をふまえたうえで、早い段階から自らの最期をどのようにしたいのか自己決定しておくことの重要性を、情熱をこめて語られた。自己決定しておかないことは、医療者を困惑させ、家族を二分し、医療費の増大は結果的に納税者にも無駄な負担をかける。いつ死が訪れるかもわからず、その時のインフォームドコンセントなど間に合わないの



で残すことが重要とお話であつた。また日本人の死生観が変化したのはバブル以後であり、日本人には看取りや死者との関係性について、伝統的な良い考え方がたくさんある、とお話も、心強く感じる事が出来た。そして最も印象に残つたのは、「Continuing Bonds (続く絆) 理論」である。これは日本の伝統文化を研究したアメリカの宗教心理学者が、死者との関係を捨て忘れるよりも、再構築した方が健全だと証明し、広く欧米で支持されている考え方だということである。生前と死後の関係の形が違うだけで、「Dead but not Lost」であると考えることは、死への恐怖や愛する者との断絶におびえる心を、きつと温かい光で包んでくれるに違いないと思うことが出来た。

特別講演終了後、ベッカー氏と四人のパネリスト、座長の吉田を含めて、会場も交えた討論が行われた。会場からの質問はベッカー氏に集中したが、まだ死の実感がない若者はどのように死を考え備えるべきか、愛する家族を失った悲嘆をどう乗り越えたらよいか、などの質問があり、ベッカー氏はひとつひとつ丁寧に誠実に答えられていた。

今回のシンポジウムを通して、超少子高齢化社会、多死社会を迎える日本において、自らや他者の死を考え備えていくことの意義を再確認したと共に、死生学よせる市民の関心もかなり高いことがわかつた。今後も異分野の研究者がそれぞれの専門性を活かしつつ話し合い、どのようなことが我々の穏やかな尊厳ある死につながっていくのかを考え、具体的な活動につなげていくことが出来ればと考えている。

